



神ノ郷城跡を愛する会
会長 足立泰敏

「神ノ郷城跡を愛する会」はこの四月に立ち上がったばかりの会です。まだ実際の活動はありませんが、市民の皆様からのご意見をいただき、ニーズにあった幅広い活用や保存に努めていきたいと考えます。以下に掲げた視点から、城跡への思いを高めていただければ幸いです。

一つ目は、「城跡を政治・生活の舞台として複眼的にとらえる」です。ミカン畑をぬって海拔52m(比高15m)の本丸跡に登ると一気に視界が開け、360度の遠望を独り占めすることができず。また、海拔50mからの眺めは、高からず低からず、人々の生活の息づかいを感じ取ることのできる高さでもあります。北側の山からは、小河川が扇状

地をつくって流れ出てきている様子がよくわかり、地形的にも興味がそそられます。加えて戦国時代の城の戦略的な機能や構造が、素人目にもイメージすることができ、これまた魅力的です。

城跡周辺に目を転じると、城にかかわる「殿市場」「矢倉場」などの小字名を発見でき、生活の舞台がよみがえります。また、当地は、永島拾山・永島岸翠・杉浦佐助などといった多くの文人や画家を輩出しており、城の存在との縁を想像させられます。

二つ目は、「城跡を他の史跡・名勝・天然記念物や文化・産業とセット化し活用する」です。近隣の清田の大クスを始め、安楽寺や赤日子遺跡、家康が陣を張った名取山、雨ごい伝説のお皿様など、これら縁の史跡などとセットし散策するのも興味倍增。そして、五月の連休は、ミカンの花見を兼ねての城跡探訪。また、中秋の名月には、殿様気分で句会を設けるのも一興、などと夢が広がります。

より多くの市民の皆様の夢からむ史跡保存・活用になることを念じつつ、頑張ってます。



学芸員 小林龍二

暑くなってきましたね。水族館では今年も、冷却器の機能が追いつかずに、飼育水の温度が上がってしまうことを恐れています。

また、夏場にもう1つやっかいなのが、海の魚たちにとって海水です。

竹島水族館では、目の前の竹島付近の海水をポンプでくみ上げ、消毒して使っています。しかし、どういわけか夏場の竹島付近の海水は塩分濃度が低く、飼育水として使えない物にならないことがよくあります。閉鎖的な三河湾の環境からでしょうか、雨の多い日などは、通常の半分以下の塩分濃度のときもあります。こんな海水でも、竹島の魚た

海の水に塩を入れる

ちは、普段生活している水なので生きていますが、南方系のきれいな魚たちなどは、塩分濃度が低すぎて弱っています。

夏場、担当者は毎日のように海へ出かけます。海水の塩分を計り、濃度が高いときに一気にくみ上げて、水族館の地下にある貯水タンク満杯に貯蔵します。

しかし、どうしても海水の塩分が薄い日が何日も続くときは、地下の海水貯蔵タンクに塩をいれることがあります。この塩は家庭用のものではなく、天然のミネラル豊富な岩塩です。

海水に塩を入れるという、なんともおかしなことをしていますが、都会の水族館では、遠洋から船やトラックで運んだ高価な海水を買い付けているところもあります。それに比べると竹島水族館は、塩分は薄くても、なんとか使える海水が近くにあるので、まだ恵まれていると思います。